

# 大学生における一般男女および性同一性障害者に対する 性役割認知の比較

今井 功士

(川畑 隆ゼミ)

## 問 題

### (1) はじめに

性同一性障害（以下GID）が社会的に認知され始めて久しい現在では、GIDに関する様々な書籍を目にする。GIDに関する説明を主にしたものから、GIDを専門的に扱う高度な専門書、他にもGID当事者の自伝本など多様であり、ドラマなどにも取り上げられていることからその障害名を知っている人がほとんどであろう。GIDは簡単には「心の性と体の性が不一致な状態」と言われている。この言い方の根底には「心の性と体の性は一致しているものだ」といった考え方がある。しかし、「性」というものは単純に男と女に二分はできず多様なものである。にもかかわらず多くの人は男女二元論的な考えによる性役割認知を支持しているが、近年では性別ではなく個として人を見ることが主張するジェンダーフリーの考え方もあらわれ、性に関する論議は様々な場面で展開されている。

### (2) 性同一性障害

日本においてGIDが社会的に認知されたのは、1997年に日本精神神経学会が「GIDに関する診断と治療のガイドライン」（以下初版ガイドライン）を策定し、1998年に埼玉医科大学が日本で初めての公式な性別適合手術（以下SRS）を実施したという一連の動きを、テレビや新聞などが大きく取り上げたことによる。その後2004年に「GID者の性別の取り扱いの特例に関する法律」が施行され、戸籍上の性別表記を変更できるようになったことでGIDを取り巻く環境は大きな変化をみせた。しかし、戸籍の性別表記変更を望むGID者のすべてに適用されるわけではなく、5つの要件「1. 20歳以上であること。2. 現に婚姻をしていないこと。3. 現に子がいないこと。4. 生殖腺がない

こと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること。5. その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること。」を満たさなくてはならない。鶴田（2006）によると、「1. 20歳以上であること」は妥当だという意見が多く述べられたらしい。また「2. 現に婚姻していないこと」に関しては3つの立場「あってもかまわない・条件付きですでになされている婚姻も認めるのがよい・同性婚が認められるのがよい」があり、「同性婚が認められるのがよい」という意見が圧倒的に多かったという。「3. 現に子がいないこと」は撤廃を求める声が多かったとしている。さらに要件の4と5について、これらはSRSの実施を強いるものであり、当事者のなかには金銭的もしくは身体的な負担を理由に、SRSの実施が困難であったり性器の変更をせずに戸籍を変更したいという人もおり、そういった人たちにとっては問題であることが述べられている。そのようななかで2008年に「現に子がいないこと」は「現に未成年の子がいないこと」に緩和された。このようにGID当事者の声をもとにこれからも様々な変更がなされていくだろう。しかし、特例法の改定のみでGID者の生活の質（QOL）が向上していくだろうか。「社会全般が性の多様性を知り、戸籍などに記載される書類上の性別ではなく、目の前にいる個人のあり方を見て、判断することが大事なのだ」と野宮（2008）は述べている。

### (3) 性役割

性役割とは性別に対して社会的に期待されている役割であり、時代、社会、文化に影響を受けて著しく変動し、「男らしさ・女らしさ」という言葉に代表されるジェンダーの概念を構成する1つの要素である。柏木（1974）は、「性役割認知の習得は、青年期の発達の課題の一つの重要な側面で

ある」と指摘し、「性役割認知の傾向として男子は男女の性役割を対照的なものとする分化した認知構造が成立しているのに対し、女子は女性の役割特性の期待は消極的で、男性の役割と一般的にはされているものを高く評価している」と述べている。これは、男尊女卑的な観念にもとづいた認知傾向が一般的に存在することを示していると考えられる。伊藤・秋津（1983）は、青年期における性役割認知の発達過程を明らかにすることを目的とした研究から、「価値および期待にみられる成人同様の性役割のステレオタイプはすでに青年前期には獲得されている」ことを見出し、さらに「性役割認知形成における発達の推移には性差がみられ、男子が年齢上昇とともに男性役割の価値を高めていくのに対して、女子では高校を境に転換がみられ、女性役割から男性役割への価値の移行が生じている。そのため、学年が進むにつれ男子が男性役割と女性役割の自己に占める価値を明瞭に峻別していくのに対して、女子では男性役割、女性役割の双方が自己の価値規範として受け入れられるようになる」と述べている。男性役割が優れたものであることで女性も身につけるべきだとする認知傾向が存在するのであろう。1990年代になると性役割認知に変化が見られるようになった。久國・白井（1991）は、「男性は伝統的性役割認知を肯定しているが、その性役割認知を理想としながらも、自己の性役割には現実していない（注1）。対して女性は将来のライフスタイルに応じて伝統的性役割認知を持つ者と、伝統的性役割認知を否定し、自己の性役割を理想としない者に2分化する」と述べている。男性役割のみが優れたものであるといった、今までの認知傾向に疑問を持ち始めたのだろう。2000年代に入り、男女の性役割観について後藤・廣岡（2003）は、「男女の役割が近づき女性役割は以前よりも社会的に望ましいものに変化した。しかし、男性役割期待には未だ強固なステレオタイプが保たれており、今後は男性も性役割との間で葛藤を感じる」と述べている。つまり、これまで男性は男性役割を追究することのみが重要とされていたが、女性役割が社会的に望ましいと見なされるようになったことで葛藤が生じるというわけである。向井（2008）は伊藤（1978）の結果を比較対象とし、性役割認

知の変化を調査した。その結果、「女性性が人間性や男性性ほどではないがある程度重要視されるようになってきている。つまり、女性としての役割や気質などが周囲に認められ、なおかつ男性にも女性にも望ましいものとされるようになってきている」と述べ、加えて「性に対するステレオタイプは変化を見せており、男は仕事、女は家庭という男女の違いを示すような言葉は現代の青年には過去のものであると認識されている」とも述べている。以上のように性役割認知はこの30、40年の間で変化をみせ続けている。

注1：男性が理想とする男性の性役割認知と自己の性役割を比較しているため、このような表記になっている。

#### (4) ジェンダーフリー

ジェンダーは生物学的性別（sex）とは異なり、社会や文化などに規定される性別である。「男は仕事、女は家事」のような考え方はこれまでの日本において主張されてきたジェンダー観であるが、近年ではこういった考え方には属さないジェンダーフリー観を育てるために、就学前の段階から様々な取組みを実施することが重要とされている。

まず、ジェンダーフリーとは「社会的・文化的性差からの自由を目指す考え方であり、社会的文化的性差であるジェンダーにとらわれず、個人それぞれが自分らしく個人としての資質に基づいて果たすべき役割を自己決定できるようにしようという考え方、運動である（若松2007）」とされている。就学前の段階からジェンダーフリー教育をする理由は、ゴロンボクとフィヴァッシュ（Golombok, S. and Fivush, R. 1994）が「子どものジェンダーについての知識はすでに2、3歳で習得され始める」と述べたことによる。ジェンダー観の形成について石倉（2008）は保育施設が大きな影響を及ぼしていると考え、ジェンダー観の形成のメカニズムを明らかにしようとした。そして、保育施設においてジェンダー観を形成する「隠れたカリキュラム」の構造を示し、ジェンダーフリーな保育室を目指すために3つの場面で留意点を指摘したのである。「保育者（注2）が広く社会に関する問題意識を持つこと、ジェンダーや様々な価値観について深く考える眼差しをもつことが必要であり、保育者養成に携わる者は保育に

直接関係する知識や専門性を伝授するのみならず、社会に対する関心、及び考える力を養うことに留意する必要がある」と述べている。だが、実際には何がジェンダー観を育成する要因となるかは特定できないため、保育者と保育者養成に携わる人間以外の人々もこれらの点について留意する必要があるだろう。このように、ジェンダーフリー教育やそれについての保育における取組みの重要性を説いた論文や研究は数多くある（金子・青野2004）（石倉2008）。しかし、石倉（2008）によると「日本において、ジェンダーフリーは広い理解を得ているとは言いがたい」状況にある。その背景には、ジェンダーフリー・バッシングが大きく影響していると考えられる。

ジェンダーフリー・バッシングの一つとして林（1999）は、「1. ジェンダーフリーによる文化の否定。2. 社会のための個人を支える“らしさ”概念。3. 二項対立の必要性。」を述べている。1はジェンダーを「文化の必然の産物」とし、ジェンダーフリー教育は文化の破壊と野蛮への逆戻りが起きると考えている。2はジェンダーをはじめとする具体的な“らしさ”を放棄することは若者のアイデンティティ獲得を阻害し、社会的不適応者にすると考えており、3は男女の二項対立の思考が文化の形成には必要不可欠であり、さらに生物としての二項対立の必要性があるため、アイデンティティ獲得にとっての二項対立も必要としている。以上の議論をもとに若松（2007）は、林（1999）の議論の根底には「これまで信じてきた価値観や秩序、頼ってきた構造の安定性が揺らぐことへの不安があるのではないだろうか」と推論し、とくに3について若松（2007）は、「役割分業による一方の性の優位性の維持ではなく、2つの立場を並行させることによる秩序や構造の安定化を図ることが最重要視されているように思われる」と述べている。以上のようにジェンダーフリーについては賛否両論があり、現在ではジェンダーフリーに関する運動はこう着状態にあるといえる。ジェンダー観の初期形成は2、3歳であるが、性役割の認知について伊藤（1978）は、「青年期が男女の性の違い、性により期待される役割の違いを最も敏感に知覚する時期」と述べ、青年期の性役割認知の研究に積極的に取り組んでいる。

注2：保護者や保育士などの保育に直接的に関与している人をさすと解釈した。

## 目 的

向井（2007）は「現代の青年期の性役割認知は伝統的性役割認知と比べて変化を示している」と述べている。つまり、伝統的性役割認知により規定された「男らしさ・女らしさ」から、性にとられない平等主義的な認知へと変化していることを示唆している。これはジェンダーフリーに関する運動（たとえば男女混合名簿、生徒全員に対する「さん」づけでの呼称など）の1つの結果としても解釈することができる。しかし、こういった男女平等主義的な認知は、GIDを抱えている人々にも適用されるのであろうか。つまり、MTFなら過度に女性性を期待され、FTMなら過度に男性性を期待されるという事態にはならないのかという疑問である。これまでの伝統的性役割認知が支持されていた時代において、GIDの人々は「男らしさ・女らしさ」に当てはまらないという理由で差別やいじめを受けてきた。では伝統的性役割認知が薄らいできている現在ならFTM・MTFに期待する性役割も男女へのそれと一致すると考えられる。そこで本研究では、大学生を対象に一般男女とGID者（MTF、FTM）に対する性役割認知が一致するかどうかの調査を行なった。

## 方 法

### (1) 調査協力者

京都学園大学の大学生135名（男性103名、女性32名、MTF1名）が調査に協力した。調査協力者は18～26歳で、平均年齢は20.30歳（男性20.14歳、女性20.18歳）であった。なおMTFについては女性として扱っている。

### (2) 調査方法・調査時期

2009年10月下旬～11月上旬にかけて授業の一部の時間を用いて質問紙を配布し、回答を得た。所要時間は15分程度であった。有効回答数は104名（男性78名、女性26名）、有効回答率は77.04%（男性75.73%、女性78.79%）であった。

### (3) 手続

伊藤（1978）が作成したM-H-F尺度（表1）を使用した。この尺度は、3つの役割特性（男性性、

女性性、人間性) から成っている。ただし設定されていた評価概念(個人的評価, 社会的評価, 男性役割期待, 女性役割期待)を一部変更して実施した(個人的評価と社会的評価を, それぞれMTF役割期待とFTM役割期待に変更)。そうすることで, MTFとFTMが期待されている役割特性を測定でき, 男性と女性が期待されている役割特性との比較も可能となった。しかし, 個人的評価と社会的評価を評価概念から省いたため, 被験者自身が理想とする自己の性役割認知と, 社会一般に期待する性役割認知の結果は得られなかった。

質問紙を実施する前に, 口頭でMTFとFTMについての説明(「MTFは男性から女性へ性別を移行する人もしくは移行した人。FTMは女性から男性へ性別を移行する人もしくは移行した人」)を行った。加えて, 「MTFとFTMの人に関する質問への回答の際にはテレビなどで出演している人をイメージしないように」と教示した。これはテレビに出演している人がそのままMTF, FTMだとは限らないことや, 出演している人に対するイメージを優先させて回答しないようにとの配慮からであった。また, 各評価概念について質問紙内

で行なった教示は以下の通りである。

男性役割期待: 男性にとって次のような性質を備えることはどの程度重要であると思いますか

女性役割期待: 女性にとって次のような性質を備えることはどの程度重要であると思いますか

MTF役割期待: MTF(男性から女性へ性別を移行する人もしくは移行した人)にとって次のような性質を備えることはどの程度重要であると思いますか

FTM役割期待: FTM(女性から男性へ性別を移行する人もしくは移行した人)にとって次のような性質を備えることはどの程度重要であると思いますか

評定方法は「0. まったく重要でない」から「6. 非常に重要である」の7段階評定で行なった。

表1 MHF尺度

男性性(Masculinity)	女性性(Femininity)	人間性(Humanity)
・行動力のある	・おしゃれな	・忍耐強い
・意志の強い	・色気のある	・心の広い
・大胆な	・かわいい	・頭の良い
・指導力のある	・繊細な	・明るい
・頼りがいのある	・従順な	・暖かい
・決断力のある	・優雅な	・誠実な
・たくましい	・言葉使いのていねいな	・健康な
・自己主張のできる	・静かな	・率直な
・信念を持った	・献身的な	・自分の生き方のある
・冒険心に富んだ	・愛嬌のある	・視野の広い

## 結 果

### (1) 4つの評価概念の認知

男性役割期待は図1-1に示されるように、男性は男性性(45.38)を最も重要だと認知し、次いで人間性(43.96)、女性性(32.76)の順番になっている。女性は人間性(47.65)を最も重要だと認知し、次いで男性性(46.04)、女性性の順である(33.54)。

女性役割期待は図1-2に示されるように、男女ともに人間性を最も重要だとしている(男性43.85 女性46.85)。次いで女性性(男性42.88 女性42.77)、男性性(男性36.44 女性39.62)の順である。

MTF役割期待は図1-3に示されるように、男女ともに人間性(男性43.60 女性46.35)を最も重要だとし、次いで男性性(男性41.86 女性43.62)、女性性(男性37.23 女性39.62)の順となっている。

FTM役割期待は図1-4に示すように、男女ともに男性性(男性44.38 女性48.35)を最も重要だとし、次いで人間性(男性43.09 女性46.96)、女性性(男性33.32 女性33.73)の順である。

男性役割期待とFTM役割期待を比べてみると、

図1-1 男性役割期待の男女別平均値

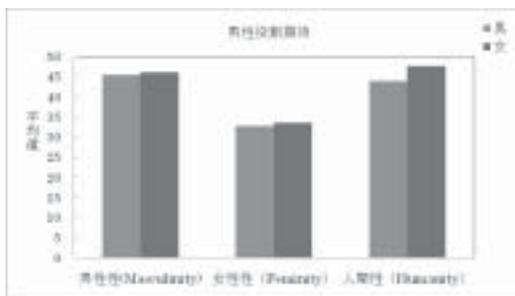
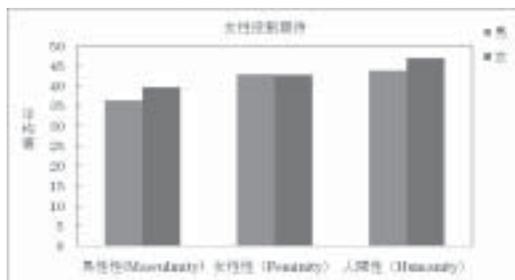


図1-2 女性役割期待の男女別平均値



男性性と人間性が高く、女性性が両特性に比べて低いという形を共有していることがわかる。一方、女性役割期待とMTF役割期待を比べると期待する役割特性の順が異なっている。女性役割期待では人間性、女性性、男性性の順に重要だとされているが、MTF役割期待では人間性、男性性、女性性の順となっている。

### (2) 3つの役割特性における4つの評価概念の認知

表2は、評価概念における各役割特性の平均得点を男女別にまとめたものである。

男性性をもっとも期待されているのは被験者男においては男性であり(45.38)、次いでFTM(44.38)、MTF(41.86)、女性(36.44)である。被験者女においてはFTMがもっとも男性性を期待されており(48.35)、次いで男性(46.04)、MTF(43.62)、女性(39.62)である。

女性性をもっとも期待されているのは被験者男女共に女性であり(42.88, 42.77)、次いで、MTF(37.23, 39.62)、FTM(33.32, 33.73)、男性(32.76, 33.54)である。

人間性はどの評価概念においても高く期待されており、ほとんど差異は見られない。そこで3つの役割特性(男性性・女性性・人間性)が4つの評価概念(男性役割期待・女性役割期待・MTF

図1-3 MTF役割期待の男女別平均値

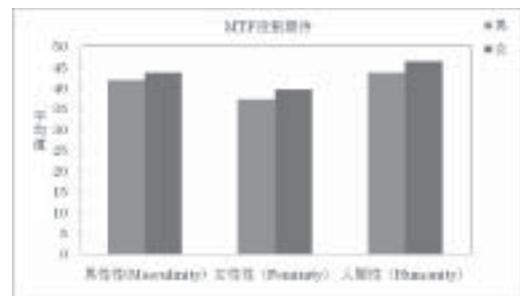
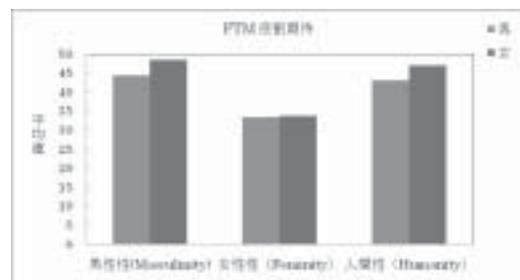


図1-4 FTM役割期待の男女別平均値



役割期待・FTM役割期待)によってどのように評価されているかを明らかにするために、各役割特性について被験者性別と評価概念を要因とする  $2 \times 4$  の分散分析を行なった。

それによると、男性性では性別に主効果はみられなかった ( $F(1, 102) = 1.29, n.s.$ )。評価概念には主効果がみられた ( $F(3, 306) = 24.43, p < .01$ )。そのため、Bonferroniによる多重比較を行なったところ、「男性役割期待と女性役割期待」、「女性役割期待とMTF役割期待・FTM役割期待」、「MTF役割期待とFTM役割期待」の間に1%水準で有意な差がみられた。性別  $\times$  評価概念の交互作用は有意ではなかった ( $F(3, 306) = .91, n.s.$ )。女性性では性別に主効果はみられなかった ( $F(1, 102) = .15, n.s.$ )。評価概念には主効果がみられた ( $F(3, 306) = 47.12, p < .01$ )。そのため、Bonferroniによる多重比較を行なったところ、「男性役割期待とFTM役割期待」を除くすべての水準間に1%水準で有意な差がみられた。性別  $\times$  評価概念の交互作用は有意ではなかった ( $F(3, 306) = .65, n.s.$ )。

人間性では性別にも評価概念にも主効果はみられなかった ( $F(1, 102) = 2.18, n.s.$ ) ( $F(3, 306) = .58, n.s.$ )。

表2 評価概念における各役割特性の得点

評価概念		男性役割期待	女性役割期待	MTF 役割期待	FTM 役割期待
scale	sex				
男性性(Masculinity)	男	45.38 (10.41)	36.44 (12.54)	41.86 (12.43)	44.38 (12.23)
	女	46.04 (5.44)	39.62 (7.61)	43.62 (8.23)	48.35 (8.14)
女性性(Femininity)	男	32.76 (11.20)	42.88 (10.75)	37.23 (12.85)	33.32 (12.97)
	女	33.54 (8.03)	42.77 (6.60)	39.62 (8.66)	33.73 (9.30)
人間性(Humanity)	男	43.96 (10.42)	43.85 (11.03)	43.60 (12.50)	43.09 (12.42)
	女	47.65 (5.28)	46.85 (6.42)	46.35 (7.73)	46.96 (8.22)

( ) 内は S.D.

### (3) 男性役割期待と女性役割期待の向井 (2007) の結果との比較

表3, 4は男性役割期待における各性別と女性役割期待における各役割特性を、それぞれ向井(2007)の結果と比較したものである。すべての役割特性の得点が向井の結果と比べて高くなっていることがわかる。

## 考 察

各役割特性において性別と評価概念を要因とす

表3 男性役割期待における向井の結果と本調査結果との比較

		本調査結果		向井の結果	
		NM=78	NF=26	NM=81	NF=122
男性役割期待	男性性(Masculinity)				
	男性	45.38(10.41)		40.74(6.52)	
	女性	46.04 (5.44)		42.70(4.57)	
	女性性(Femininity)				
	男性	32.76(11.20)		30.95(6.36)	
	女性	33.54 (8.03)		31.85(5.62)	
人間性(Humanity)					
男性	43.96(10.42)		40.69(6.20)		
女性	47.65 (5.28)		43.50(4.38)		

NM: 男性被験者数, NF: 女性被験者数

表4 女性役割期待における向井の結果と本調査結果との比較

		本調査結果		向井の結果	
		NM=78	NF=26	NM=81	NF=122
女性役割期待	男性性(Masculinity)				
	男性	36.44(12.54)		33.57(7.09)	
	女性	39.62 (7.61)		36.87(5.26)	
	女性性(Femininity)				
	男性	42.88(10.75)		38.43(6.02)	
	女性	42.77 (6.60)		39.07(4.51)	
人間性(Humanity)					
男性	43.85(11.03)		39.80(6.05)		
女性	46.85 (6.42)		42.02(4.29)		

NM: 男性被験者数, NF: 女性被験者数

る  $2 \times 4$  の分散分析の結果、性別には主効果がみられなかったことから男女間での認知傾向は一致していると考えられる。一方、評価概念においては主効果がみられた。つまり、現在の性別認知は自己の性別(被験者の性別)と関係なく、認知する相手(評価概念)により変化すると考えられる。

男性役割期待は向井(2008)の結果と同じく男性性と人間性が同程度重要とされ、女性性はそれらと比べれば低い値となっている。

女性役割期待は女性性と人間性が同程度重要とされており、それに男性性が次ぐ形となっている。しかし女性役割期待の男性性は男性役割期待の女性性に比べて値が高く、他の役割特性と近い値をとっている。このことから、女性の性に関する葛藤は男性のそれと比べてより深刻であると考えられる。女性であるがゆえに女性性を期待され、さらには男性性も人間性も期待されている。現在の女性は過去の女性以上に性別に葛藤を生じやすくなっているのかもしれない。

また男性役割期待の女性性の数値は今後さらに

伸びることが予測される。男性も性役割との間で葛藤を経験するようになる可能性を示唆した後藤・廣岡 (2003) の言説は、すでに現実化しているのではあるまいか。

一方、MTF役割期待については予想とは異なった結果が出た。MTFが女性として扱われるならば女性役割期待と似た評価となると考えられる。つまり、女性性と人間性が同程度重要とされ、それに男性性が次ぐという形である。しかし、結果は男性性と人間性が同程度重要とされ、女性性がそれらよりやや低い値をとっている。FTMについて行なったと同様、MTFについても「男性から女性へ性別を移行する人もしくは移行した人」という説明を行なったうえで質問紙を実施したが、女性性が一番低い値をとったのは性別変更前の男性に対して期待をしたことの結果か、それとも女性性になっても男性性は必要とする考えによるものかは不明である。しかし、大森 (2007) の「生物学的男性が反対性の服装をした場合の社会的な受け入れは低く、逆に生物学的女性が反対性の服装をした場合は社会的にあまり問題とされない風潮がある」という指摘を考慮に入れると、MTFは社会的には女性として認知されにくいのかもかもしれない。

FTM役割期待に関しては男性役割期待と同じく男性性と人間性が同程度重要で、女性性はそれらと比べ低い値にあり、多重比較の結果からもFTM役割期待と男性役割期待には有意な差がないことから、FTMは男性として認知されやすい傾向があるといえる。

真鍋・花田・上石 (2000) は、「MTFはFTMに比べて社会適応の悪さが目立つ」と述べている。今回のMTF役割期待の結果によってそのことを説明できるように思う。FTMが期待されている性役割は男性の期待されている性役割とほぼ一致していることから、FTMは男性として扱われやすい。したがって社会的に適応しやすいと考えられる。しかし、MTFが期待されている性役割は男性役割期待にも女性役割期待にも一致していない。つまり、MTFは男女二元論的な考え方をすればどちらにも属さない性として扱われる。それが差別やいじめの原因となり、MTFの社会適応を阻害しているのではないだろうか。

性別二元論からジェンダーフリーへと変化した社会はどのような幸福をもたらすのかとの疑問に対して、石倉 (2008) は植村みのりの意見を引用し、その意見を「一つのユートピア的ビジョンであるが、ジェンダーフリーの社会は、現代社会の行き詰まったさまざまな問題を解決するように思われるのである」と述べている。ではジェンダーフリーになることでGID者の環境は変わるであろうか。DSM-TRによるとGIDとは、「反対の性に対する強く持続的な同一感 (他の性であることによって得られると思う文化的有利性に対する欲求だけではない)」、「自分の性に対する持続的な不快感、またはその性の役割についての不適切感」、「身体的に半陰陽を伴っていない」、「臨床的に著しい苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こしている」という基準を満たす精神化領域の疾患であるとされている。ジェンダーフリーになれば社会的、職業的な機能の障害は起きなくなると考えられるが、「反対の性に対する強く持続的な同一感」や「自分の性に対する持続的な不快感、またはその性の役割についての不適切感」といった感情は本人以外に知る術がなく、GIDのもっとも中核的な症状にはジェンダーフリーの効果はないように思われる。そもそもGIDの原因論においては、近年では身体の性別とは反対の方向への脳の性分化発達という説が有力とされている。この説はオランダのスワブ (Swaab, 1995) がMTFの死後脳を調査し、分解条床核の体積について報告した研究に根拠づけられている。この説を支持する現在においてGIDは、もはや精神科領域ではなく脳外科的な分野の対象となるのかもしれない。しかし、実際にはGID者は身体の性と自己の考える性との間に持つ不快感だけを症状とはしておらず、社会的に希求される性役割との不一致により、うつ状態や適応障害に陥るのである。ジェンダーフリーの効果はGID本来の症状には及ばないだろうが、うつ状態や適応障害などの副次的な症状には効果を発揮すると考えられる。社会全体がジェンダーフリーの考えを共有できればGIDは本来の症状の治療にのみ専念できるであろう。しかし、本来の症状を治療する場合にも課題は数多く存在している。GIDの治療法として、精神科領域の治療 (精神科

的サポート), ホルモン療法, 外科的治療法 (FTMにおける乳房切除術), SRSなどが挙げられる。現在, ガイドラインに則って診断からSRSまでが可能な医療機関 (ジェンダークリニック) は全国でも数えるほどしかない状態であり, 全国に散在するGID者は一部の医療機関に集中することになる。そのためSRSを国内で公式に受けるためには何年も待たなくてはならない。さらに, GIDは精神科領域の治療を除けば原則として医療保険の適用がなされないので, SRSは高額な手術でもある。以上のような状況からSRSを希望するGID者のなかには国外で安くSRSを受ける者も少なくないようである。その際に渡航手配や通訳をパッケージにしてサービスを提供する「アテンダント会社」が利用されるが, 「アテンダント会社」の危険性を石田 (2008) は, 「例えば入院中の医師との意思疎通を謳っている場合でも, 目の前に患者と医師がいる状態で, 言語的に意思疎通が難をきたしているとき, 日本に在留する電話サポーターが国際電話で遠隔的に通訳しながら意思疎通を高めるといった程度でしかない。また手術誓約書に対して細かな翻訳や説明が見つからないことがあるなど, インフォームド・コンセントの面からいって, いざという時にクライアントが大きな危険や不利をとまなう選択である」と述べている。また, SRSを終えたからといってGIDの治療が完了したわけではなく, 原科 (2008) は「GIDの治療においては手術が最終ゴールであるとかく考えられ, 手術さえ受ければ世の中がバラ色になるような幻想を抱きがちです。しかし性転換法, 差別禁止法などが整備されている先進諸国においてさえ, 手術後の生活も術前と同様に決して平易なものではないようです。最大, 最終目標である手術をやったり終えても, それはあくまでも非露出部での変化に過ぎません。その結果取り巻く状況がさして変わらないことへの失望感, 焦燥感, 過去をすべて捨て去り, 新しい性別での人生を歩まなければならないための孤独感などにさいなまれます。そのため術前にも増した精神的サポートが重要であることを銘記すべきです」と述べ, 術後の精神的サポートの重要性を訴えている。GID者が安心して治療を受けられるためにも診断からSRSまでが可能な一貫した医療機関を国内に増設することに

加え, GID治療が保険の対象になることが望ましいと考えられる。

本研究において, 調査協力者の1人であるMTFを女性として扱ったが, これは大きな反省点であった。MTFだからといって女性として扱われることを本人は望んでいないかもしれないし, 何より自称MTFという可能性も有り得る。どちらにしる, 調査協力者にMTFやFTMがいることも考え, そのどちらかの性別で回答した調査協力者をどのように扱うかも考慮した研究計画が必要であった。

### まとめと今後の課題

本研究では大学生を対象とし, 一般男女とGID者に対する性役割認知が一致しているかどうかを, 伊藤 (1978) が作成したM-H-F尺度の評価概念を一部変更したものをを用いて調査した。各評価概念 (男性役割期待・女性役割期待・MTF役割期待・FTM役割期待) ごとに3つの役割特性 (男性性・女性性・人間性) を調査協力者に評定させた。結果は男性役割期待は男性性と人間性が同程度重要とされ, 女性性はそれらと比べて低い値となっている。女性役割期待は女性性と人間性が同程度重要とされ, それに男性性が次ぐ形となっている。MTF役割期待は男性性と人間性が同程度重要とされ, 女性性がそれらよりやや低い値をとっている。FTM役割期待は男性役割期待とほぼ同じ役割を期待されている。結果より, 男性, 女性, MTF, FTMに対する性役割認知は一部に違いがあることがわかった。

今回の調査により大学生における一般男女とGID者 (MTF, FTM) に対する性役割認知には一部違いがあることがわかった。しかし, 何が原因で認知に差があらわれたかは判断できなかった。今後の課題として, 男女とMTF, FTMの性役割認知が異なった理由を見つけることが, GID者の差別をなくす1つの手がかりにつながると考える。また被験者をGID者で実施することでGID者の期待する役割期待を明確にすることも重要だろう。冒頭で述べたように, 性に関する論議は様々な場面で行なわれている。本研究で取り上げたGIDは性的マイノリティに含まれる。性的マイノリティとは, 上野 (2008) によれば「身体的性別 (sex),

性自認 (gender identity), 性的指向 (sexual orientation) などが, 男女二元論と異性愛主義社会の「常識」に対応しないものを指す」とされる。GID 以外にもレズビアン, ゲイ, パイセクシュアル, トランスジェンダー (以下LGBT), インターセックスも性的マイノリティに含まれる。「LGBは性的指向に関するもので, トランスジェンダーは性自認に関するものであり, なかでも手術などで身体的性別を変更しようとする者をトランスセクシュアルと呼び, これを障害として捉えた場合にGIDという診断名となる」(上野2008)。インターセックスは身体的性別に関するものである。性的マイノリティのそれぞれが現在の社会的に当然とされる男女二元論, 異性愛主義のもとでは「異常者・変質者」といった目で見られている。上野 (2008) は, 「性的マイノリティの存在やその実態を知ること, 当事者の苦悩を和らげ, 当事者同士のネットワーク作りを促すばかりでなく, 非当事者の受容を促す」と述べている。性の多様性を自らに通じる問題として認識することが重要だと考える。そして, 性の多様性を考えることは, 日常生活の至るところでの柔軟な選択を可能にするであろう。

## 謝 辞

本論文の作成にあたりご指導いただいた京都学園大学人間文化学部の川畑隆先生, 行廣隆次先生, ならびに, 文献の取り寄せの際にお世話になった関西学院大学文学部教育心理学研究室の磯部直彦様, 調査にご協力して頂いた学生の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

## 引用文献・参考文献

- 鶴田幸恵 2006 性同一性障害ジェンダー・医療・特例法 性同一性障害を抱える人びとの見解 (1) - インタビューから明らかにされた特例法への評価 御茶の水書房 p105-131
- 石田仁 2008 性同一性障害ジェンダー・医療・特例法 総論性同一性障害 御茶の水書房 p3-35
- 野宮亜紀 2008 プロブレムQ&A性同一性障害って何? [一人一人の性のありようを大切にするために] 緑風出版 p224-227
- 原科孝雄 2008 プロブレムQ&A性同一性障害って何? [一人一人の性のありようを大切にするために] 緑風出版 p92-100
- 加藤秀一 石田仁 海老原 暁子 2005 図解雑学ジェンダー ナツメ社
- 土橋功昌 2007 トランスセクシュアリズムを中心とした性同一性障害の心理臨床 - 診断と治療のガイドラインをめぐって 臨床心理学7 (6) p807-817
- 阿部輝夫 2006 性同一性障害について 順天堂医学52 (1) p55-61
- 山根望・名島潤慈 2006 性同一性障害 (GID) に関する心理学的研究の近年の動向 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要21p231-247
- 上野淳子 2008 心理学における性的マイノリティ研究: 教育への視座 四天王寺大学紀要46 p73-83
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知 ( ) : 女子学生青年を中心として 日本教育心理学研究22(4) p205-215
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究31(2) p146-151
- 久國淑子・白井利明 1991 青年期における性の受容と性役割観に関する発達的研究 大阪教育大学紀要, 教育科学39 (2) p231-242
- 後藤淳子・廣岡秀一 2003 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化 三重大学教育学部研究紀要, 教育科学54 p145-158
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 日本教育心理学会誌26 (1) p1-11
- 若松孝司 2007 ジェンダーフリー・バッシングに関する一考察 愛知淑徳大学論集, 文化創造学部・文化創造研究科篇7 p139-151
- ゴロンボク, S. ・フィヴァッシュ, R. (小林芳郎・瀧野揚三 訳) 1997 ジェンダーの発達心理学 田研出版株式会社 (Golombok, S. and Fivush, R. (1994) Gender Development, Cambridge University Press, New York) p32-35
- 石倉瑞恵 2008 ジェンダー・フリーの価値観育成を目指す保育 岡崎女子短期大学研究紀要41 p61-69

- 青野篤子・金子省子 2008 保育にかかわる保護者のジェンダー観 日本家政学会誌59 (3) p 135-142
- 林道義 1999 フェミニズムの害毒 草思社 1999
- 向井心一 2007 現代の青年期における性役割認知と過去の青年期における性役割認知の比較 臨床教育心理学研究33 (1) p101
- 大森秀之 2007 性同一性障害における精神医学的検討 近畿大学医学雑誌32 (1) p31-37
- 真鍋幸嗣・花田雅憲・上石弘 2000 性同一性障害患者の性差 近畿大学医学雑誌25 (2) p 165-169

## 資料

## 大学生の役割評価調査

この質問紙は、皆さんが「各性別\*について一般的にどのような性質を備えていることが重要だと考えているか」を調査するものです。結果はすべて統計的に処理されますので、回答者を特定したり、公表したりするようなことは決してありません。

\*各性別には「男性・女性・MTF・FTM」の4つがあります。MTFとFTMは性同一性障害の人で、MTFは男性から女性へ性別を移行する人、もしくは移行した人であり、FTMは女性から男性へ性別を移行する人、もしくは移行した人です。

なお MTF, FTM の人について答える場合、テレビなどで出演している人をイメージしないように教えてください。

性別 ( )

年齢 ( )

回生 ( )

京都学園大学人間文化学部人間関係学科 4 回生  
今井 功士

選択肢の中から、あなたの考えにもっともよく当てはまると思う番号に○印をつけて答えてください。

0. 全く重要でない      1. あまり重要でない    2. やや重要でない  
 3. どちらともいえない    4. やや重要である      5. かなり重要である  
 6. 非常に重要である

男性にとって次のような性質を備えることはどの程度重要だと思いますか

1. 冒険心に富んだ	0	1	2	3	4	5	6
2. 心の広い	0	1	2	3	4	5	6
3. かわいい	0	1	2	3	4	5	6
4. 健康な	0	1	2	3	4	5	6
5. 信念を持った	0	1	2	3	4	5	6
6. 色気のある	0	1	2	3	4	5	6
7. 行動力のある	0	1	2	3	4	5	6
8. 自己主張のできる	0	1	2	3	4	5	6
9. おしゃれな	0	1	2	3	4	5	6
10. 決断力のある	0	1	2	3	4	5	6
11. 忍耐強い	0	1	2	3	4	5	6
12. たくましい	0	1	2	3	4	5	6
13. 頭の良い	0	1	2	3	4	5	6
14. 繊細な	0	1	2	3	4	5	6
15. 暖かい	0	1	2	3	4	5	6
16. 誠実な	0	1	2	3	4	5	6
17. 指導力のある	0	1	2	3	4	5	6
18. 率直な	0	1	2	3	4	5	6
19. 自分の生き方のある	0	1	2	3	4	5	6
20. 視野の広い	0	1	2	3	4	5	6
21. 大胆な	0	1	2	3	4	5	6
22. 優雅な	0	1	2	3	4	5	6
23. 頼りがいのある	0	1	2	3	4	5	6
24. 献身的な	0	1	2	3	4	5	6
25. 愛嬌のある	0	1	2	3	4	5	6
26. 言葉使いのていねいな	0	1	2	3	4	5	6
27. 明るい	0	1	2	3	4	5	6
28. 従順な	0	1	2	3	4	5	6
29. 静かな	0	1	2	3	4	5	6
30. 意志の強い	0	1	2	3	4	5	6

女性にとって次のような性質を備えることはどの程度重要だと思いますか

1. 冒険心に富んだ	0	1	2	3	4	5	6
2. 心の広い	0	1	2	3	4	5	6
3. かわいい	0	1	2	3	4	5	6
4. 健康な	0	1	2	3	4	5	6
5. 信念を持った	0	1	2	3	4	5	6
6. 色気のある	0	1	2	3	4	5	6
7. 行動力のある	0	1	2	3	4	5	6
8. 自己主張のできる	0	1	2	3	4	5	6
9. おしゃれな	0	1	2	3	4	5	6
10. 決断力のある	0	1	2	3	4	5	6
11. 忍耐強い	0	1	2	3	4	5	6
12. たくましい	0	1	2	3	4	5	6
13. 頭の良い	0	1	2	3	4	5	6
14. 繊細な	0	1	2	3	4	5	6
15. 暖かい	0	1	2	3	4	5	6
16. 誠実な	0	1	2	3	4	5	6
17. 指導力のある	0	1	2	3	4	5	6
18. 率直な	0	1	2	3	4	5	6
19. 自分の生き方のある	0	1	2	3	4	5	6
20. 視野の広い	0	1	2	3	4	5	6
21. 大胆な	0	1	2	3	4	5	6
22. 優雅な	0	1	2	3	4	5	6
23. 頼りがいのある	0	1	2	3	4	5	6
24. 献身的な	0	1	2	3	4	5	6
25. 愛嬌のある	0	1	2	3	4	5	6
26. 言葉使いのていねいな	0	1	2	3	4	5	6
27. 明るい	0	1	2	3	4	5	6
28. 従順な	0	1	2	3	4	5	6
29. 静かな	0	1	2	3	4	5	6
30. 意志の強い	0	1	2	3	4	5	6

MTF(男性から女性へ性別を移行する人, もしくは移行した人)にとって次のような性質を備えることはどの程度重要であると思いますか

1. 冒険心に富んだ	0	1	2	3	4	5	6
2. 心の広い	0	1	2	3	4	5	6
3. かわいい	0	1	2	3	4	5	6
4. 健康な	0	1	2	3	4	5	6
5. 信念を持った	0	1	2	3	4	5	6
6. 色気のある	0	1	2	3	4	5	6
7. 行動力のある	0	1	2	3	4	5	6
8. 自己主張のできる	0	1	2	3	4	5	6
9. おしゃれな	0	1	2	3	4	5	6
10. 決断力のある	0	1	2	3	4	5	6
11. 忍耐強い	0	1	2	3	4	5	6
12. たくましい	0	1	2	3	4	5	6
13. 頭の良い	0	1	2	3	4	5	6
14. 繊細な	0	1	2	3	4	5	6
15. 暖かい	0	1	2	3	4	5	6
16. 誠実な	0	1	2	3	4	5	6
17. 指導力のある	0	1	2	3	4	5	6
18. 率直な	0	1	2	3	4	5	6
19. 自分の生き方のある	0	1	2	3	4	5	6
20. 視野の広い	0	1	2	3	4	5	6
21. 大胆な	0	1	2	3	4	5	6
22. 優雅な	0	1	2	3	4	5	6
23. 頼りがいのある	0	1	2	3	4	5	6
24. 献身的な	0	1	2	3	4	5	6
25. 愛嬌のある	0	1	2	3	4	5	6
26. 言葉使いのていねいな	0	1	2	3	4	5	6
27. 明るい	0	1	2	3	4	5	6
28. 従順な	0	1	2	3	4	5	6
29. 静かな	0	1	2	3	4	5	6
30. 意志の強い	0	1	2	3	4	5	6

FTM(女性から男性へ性別を移行する人, もしくは移行した人)にとって次のような性質を備えることはどの程度重要だと思いますか

1. 冒険心に富んだ	0	1	2	3	4	5	6
2. 心の広い	0	1	2	3	4	5	6
3. かわいい	0	1	2	3	4	5	6
4. 健康な	0	1	2	3	4	5	6
5. 信念を持った	0	1	2	3	4	5	6
6. 色気のある	0	1	2	3	4	5	6
7. 行動力のある	0	1	2	3	4	5	6
8. 自己主張のできる	0	1	2	3	4	5	6
9. おしゃれな	0	1	2	3	4	5	6
10. 決断力のある	0	1	2	3	4	5	6
11. 忍耐強い	0	1	2	3	4	5	6
12. たくましい	0	1	2	3	4	5	6
13. 頭の良い	0	1	2	3	4	5	6
14. 繊細な	0	1	2	3	4	5	6
15. 暖かい	0	1	2	3	4	5	6
16. 誠実な	0	1	2	3	4	5	6
17. 指導力のある	0	1	2	3	4	5	6
18. 率直な	0	1	2	3	4	5	6
19. 自分の生き方のある	0	1	2	3	4	5	6
20. 視野の広い	0	1	2	3	4	5	6
21. 大胆な	0	1	2	3	4	5	6
22. 優雅な	0	1	2	3	4	5	6
23. 頼りがいのある	0	1	2	3	4	5	6
24. 献身的な	0	1	2	3	4	5	6
25. 愛嬌のある	0	1	2	3	4	5	6
26. 言葉使いのていねいな	0	1	2	3	4	5	6
27. 明るい	0	1	2	3	4	5	6
28. 従順な	0	1	2	3	4	5	6
29. 静かな	0	1	2	3	4	5	6
30. 意志の強い	0	1	2	3	4	5	6

以上で質問紙は終わりです。ご協力ありがとうございました。